

---

# ツギハギ

ハラダ ナオコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツギハギ

### 【Nコード】

N4846E

### 【作者名】

ハラダ ナオコ

### 【あらすじ】

僕はみーんなツギハギだらけで生きている。



(どうして母さんと父さんが死んでるの?)

瞳から暖かい雫があふれ出て、頬が引きつり喉が痛む。

気がついたら、僕は大声を上げて泣いていた。

天井には長い刀が突き刺さった母さんと父さんがいて。

僕は2人の血に染められながら泣いた。

幼い脳は、現実を打ち消すそうに楽しかった思い出を浮かばせて、僕はさらに泣き喚いていた。

そして僕が血の雨から救い出されたのは、翌日の午前10時頃だった。

今は。

さわさわと心地よい風が頬をなでる。

ふと、桜の花弁が目の前を横切った。

「…あれからもう、8年か」

父さんと母さんが死んだ、あの日。

僕はまだ、10歳だった。

そして、今。

あれから8年。

18歳になった。

特に歴史に残るほどの変化はなく、まあ…あえて言うなら、科学技術がさらに進歩したことくらいで。

人々は相変わらず個人飛行車や団体飛行車に乗って光でしかれた道路を行き来し、僕の前を横切った桜の花弁はクリーンロボットに消去される。

かつて、戦車や核兵器が存在していたなんて信じられない世界だ。

僕達からすれば、ナイフや拳銃は勿論、家庭包丁まで制限されているこの世界に戦車や核兵器と呼ばれるモノが存在していた事は、不思議でしかない。

…そう、不思議だ。

ナイフや拳銃、家庭包丁まで制限されているのに。

なぜ、

なぜ

父さんと母さんは日本刀を刺されて、

死んでいたんだろう？

まあ、今更な事だけれど。

へんなの。

まあ……いいや。

今更だし。

それじゃあ……僕は、今から殺人者を探しに行つてきます。

……とりあえず、気楽に行こー。





そして。

とある組織のアオイ寮。

僕が立っている窓口付近には、

『押してください』

と書かれた文字が繰り返し現れは、消えて行く。

そして、その文字の横には黄色いボタンがあるが、その下には手書きで

『緊急時のみ』

と書かれている。

押すべきか、押さざるべきか……

悶々と悩むが、

まあ結局押さないわけにはいかないだろ。

自分の部屋、知らないし。

管理人に聞けって言われたし。まあ、それに…

「あいさつくらいは…しないと、ねえ？」

礼儀は大切だ。

と、自分で自分に言い訳をつき、黄色いボタンを押した。

『タラララッタター！！』

…え。

『タ、タラ、タララ………テッテレー！！！！！！』

…無駄に大音量で、なんかレベルアップした時の効果音が流れた。

しかも二回目、諦めた(?)し。

…何故だ。

いや、別にいいけど。

いいけど、ねえ？

オカシイだろ。

そして、僕は待った。

待ちましたよ。

寮の管理人サンを…。

でも、

「来ないじゃん……」

これが緊急時だったらどーするんだ？

つか、

『もう押しかけてもイイですか？』

いいですよ。

『ありがとうございます。』

自分で自分に問いかけ、勢いをつけて

おもいつきり扉に跳び蹴りをくらわす。

ガコッ！！！！！

「っゝ……！！いつてえ……」

あ、足折れたって！！

絶対！！

……まあ、ムリがあることは最初から分かっていたさ。

押しかけるとはいつてもこのご時世、部屋には嚴重にセキュリティイがかかっている。

そりゃーもう

指紋・声音・虹彩・血流……

それから、ココでは特別にナンバー照合がある。

だから、入寮する前に身体のどこかに特別な機械でナンバーを書かれるのだ。

いや、書かれるというより彫っているのだろうか？

一昔前の刺青のような…けれど触感はある普通の肌となんら変わらない。  
い。

痛くもなかったし。

けれど、一生消えないらしい。

まあ、裏を返せば裏切ろうとしたって無駄っつーことなんだろうけど。

と、いうことでそう簡単にココの扉は開かないし、壊れないのだ。

だから、やっぱり相手が出てくるまで待つしかない。

でも僕はココまでの道のりで、ヒツジオーに疲れている！

そりゃーもお野を越え、山を越え、海を越え、谷を越えてココまで来たのだ。

……………早く、寝たい。



今度は。

待つこと更に、15分。

「ははははは、つーことで俺は言っちゃったわけ『お前ソレ、ヘビじゃなくてミミズだろ』ってな」

「えーそれホントお？ありえない」

ほとんど無音で扉が開いたと思ったら、

バカっぽい男とアホっぽい女の笑い声が聞こえてきた。

「いや、マジ本当だって！！んでさあ……………誰、お前」

「いやいや、アナタが誰ですか？」

男の方が俺に気づいて眉をしかめる。

女の方も見知らぬ俺に不快感を感じたらしい。

これ見よがしにイチヤイチヤと腕を組み、俺をにらみつけてくる。

「…俺あ、ココの寮監の吾妻だ。<sup>アガツマ</sup>お前は？」

「俺は、今日からココに入寮する<sup>カガリ</sup>簞です」

「今日、入寮でカガリ……？そーいやそんな奴いたなあ。わりいわりい、忘れてたぜ」

アンタそんなんで寮監つとまるんですか…。

呆れてモノも言えません。

「……まあ良いです。鍵下さい」

そう、俺の今の最優先事項は『寝ること』だ。

取り合えず部屋に行きたい。

「あー…鍵な。ちょーっと待ってけ」

「はい、早くし」「ちょっとおジユウ、早く遊びに行こおよー」

えええー…今、俺が喋ってたじゃん。

遊びとかより鍵の大事でしょー。

「はいはい、ちょお待ってけて。あ、あったコレか？」

毎日クリーンロボットが掃除しに来てるはずなのに何で探すのに時間がかかるんだ。

まだまだ改良の余地があるっつーこと？

それか一日で部屋をすんごい散らかせるってある意味才能？

まあ、どっちでもイイけど。

「ありがとうございます」

「おー。部屋は鍵にも書いてあるけど1071号室だからな。間違えんなよー」

まあ、間違えても開かないケドな。と言って寮監は女と腕を組みながらどっか行っただ。

…なんか最後までテキトーな人だな。

女好きそーだし。

てか、ココ男子寮なのに女連れ込んでいいのか？

いや、まあ男子寮だからこそ女を連れ込むんだけど…。

まあ、俺には関係ないか。

とりあえず寝に行こう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4846e/>

---

ツギハギ

2010年11月21日03時32分発行